

2026 年 8 月 16 日聖霊降臨後第 12 主日 (マタイ 15:21~28)

女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

(マタイによる福音書 15 章 27 節)

ユダヤ人は、自分たち以外の民族を「異邦人」と呼び、宗教的な祭儀から排除するだけではなく、交際することはおろか、共に食事をする事さえ禁止していました。つまり「異邦人」という言葉には、相手を蔑む意味が強かったわけです。

普段わたしたちは、自分は異邦人だという立場で聖書を読んでいます。例えば今日の福音書であれば、何度も何度もイエス様に食い下がる女性、悪霊に取りつかれて苦しんでいる娘のために憐れんで欲しいと願う、女性の立場で聖書を読むのです。

その読み方は、とても大切な視点です。神さまは自分とはまったく関係のない存在。神さまから見て自分は所詮異邦人。神さまの恵みに与ることなどできない。そうずっと思ってきた。しかしイエス様は違う。最初は冷たくあしらわれたけれども、何度もしつこく願うことによって異邦人の自分をも受け入れてくれた。そのように恵みのメッセージとして受け取れるのです。

異邦人としての自分が救いの中に入れられた。それは本当に喜ばしいメッセージです。ただ今日は、もう一つの視点でこの物語を見てみたいと思うんです。それは、弟子としての視点です。

イエス様が行かれたのは、ティルスとシドンという地方でした。この地方は地中海に面した港町で、いわゆる異邦人も多く住んでいる場所でした。そこにやって来たのがカナンという場所に生まれた女性、彼女もまた異邦人と呼ばれる人だということ

です。ユダヤ人と異邦人とは交際しない、このことはユダヤ人側からも、そして異邦人の側からも言われていることでした。だからカナン人の彼女とユダヤ人であったイエス様とは、そもそも接点がないというのが常識でした。

しかし彼女は、イエス様に願うのです。自分の愛する娘が苦しんでおり、イエス様なら何とかしてくれると思って叫ぶのです。「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」、その叫びをイエス様は聞かれたのでしょうか。聖書にはこうあります。「イエスは何もお答えにならなかった」と。それを見て、弟子たちが近寄って来て、願うわけです。さてみなさんが弟子の一人だったら、どう願うでしょうか。多くの人はこう思うでしょう。「イエス様、どうかこの女性の声にこたえてやってください」と。

7 月 28 日に熊本を襲った地震は、たくさんの人たちを悲しみの中に陥れました。家族を亡くされた方、住む場所を追われ不自由な生活を強いられている方、ニュースにはなっていない叫びが本当にたくさんあります。また先日千葉を襲った豪雨も、大変なものでした。自然の驚異の前になすすべなく立ち尽くす人たち。「神さま、どうしてですか」、「神さま、何とかしてください」、その声を聞いたときにわたしたちは一緒に、「神さま」と祈ります。その対象がクリスチャンであろうとなかろうと、そんなことはどうでもいいことなのです。

ところがこのときに弟子たちが願ったことは、こうでした。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」。とても寂しい願いです。そしてその弟子たちの言葉を受けて、イエス様はこう言われたからです。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」。

さてこの言葉、誰に向けて言われたのでしょうか。普通に考えれば、叫んでいたカナンの女性に対してです。女性があきらめて帰るように、イエス様はこのような冷たい言葉を語られた、そう考えるのが自然です。でも自分が弟子の一人としてイエス様のこの言葉を聞いたときに、なんだか自分に向けて語られているようにも思えたのです。「そうだよ、あなたの言うようにわたしは、決められた人のためだけに来たんだ。それでいいんだろ」。そう言いながらイエス様は、笑いながら続けるのです。「まあそう思っているかもしれないけれども、これからのわたしと、この女性とのやり取りを見ていてごらん」。そう言って会話を続けられた。わたしにはそう思えるのです。

女性はなおもイエス様の前にひれ伏して言います。「主よ、どうかお助けください」と。それに対してイエス様は、またも冷たい言葉を投げかけます。「子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけない」。ユダヤの人たちは異邦人のことを、「犬」と呼んでいました。つまり「小犬」と書くとかわいらしく思えますが、蔑称なのです。軽蔑しているのです。「なあ、あなたたちのパンを異邦人なんかにはやったらいけないんだろ？」、そうイエス様に弟子たちは、そしてわたしたちは言われているように感じるのです。

弟子たちは、そしてわたしたちはこのやり取りを聞いて、どう思うのでしょうか。「そうですとも、イエス様。大切な恵みです。まずわたしたちに、たくさんください。でも、異邦人に、そして教会に来ていない人に、それをやる必要はありません」。その思いを知ってか知らずか、女性はなおも続けます。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」。その言葉を聞いて、きっと弟子たちはハッとしたこ

とでしょう。なぜなら弟子たちは以前、5000 人の人たちがたった 5 つのパンと 2 匹の魚で満腹した奇跡を目の当たりにしたからです。しかもそのときに、残ったパン屑が 12 籠もあった。食卓から落ちるパン屑だけでも、実は手で抱えることさえできないほどの恵みが与えられている。そのことを弟子たちはみな、思い出さずにはいませんでした。

神さまの恵みは、あふれるほどにあるのです。「み机から落ちる屑」というとおこぼれというイメージかもしれません。でもそれでも、わたしたちには十分すぎるほど与えられている。そしてそれを、独り占めすることはないのです。自分たちの仲間だけで、分け合うものでもないのです。

わたしたちの教会の周りには、いろんな人たちがいます。いわゆるキリスト教国と違い、クリスチャンはそもそも珍しい存在です。肩身が狭い日常を過ごしておられる方もおられるかもしれません。

でも勘違いしてはいけないのは、わたしたちは救いの特権を持っているわけではないということです。神さまはわたしたちにだけ目をかけ、わたしたちにだけ恵みを与えているのではありません。神さまはすべての人を愛しておられるのです。

カナンの女性との一見冷たく見えるそのやり取りの裏には、あなたたちも同じように異邦人を受け入れなさいという願いがあるのです。自分と違う人たち、自分が避けてきた人たちと共に食卓を囲みなさいという神さまの思いがあるのです。そのことを心に留め、歩んでいきましょう。

教会が、だれに対しても開かれたものとなりますように、わたしたちがそこに集うすべての人たちと共に賛美することができますように、祈りたいと思います。